

Landau level broadening by small  
periodic perturbation

京大理 岩塚 明 (Akira IWATSUKA)

§1. Introduction

2次元平面内で定数磁場をもつシュレディンガー作用素を考える。すなわち  $B_0 > 0$  を定数とし、

$$(1) \quad H = (D_1 + \frac{B_0}{2} x_2)^2 + (D_2 - \frac{B_0}{2} x_1)^2 + V(x),$$

を  $L^2(\mathbb{R}^2)$  内の自己共役作用素として実現したものを考える。ここで  $V$  は電場のポテンシャルで  $\mathbb{R}^2$  上の実数値関数、 $D_j = \frac{1}{i} \frac{\partial}{\partial x_j}$  ( $j=1, 2$ ) とする。  $V$  が周期的な場合の  $H$  のスペクトルについて調べる。簡単のため  $T_1, T_2 > 0$  とし

$$(2) \quad V(x_1 + T_1, x_2) = V(x_1, x_2 + T_2) = V(x_1, x_2) \quad \forall (x_1, x_2) \in \mathbb{R}^2$$

という周期性をもつものとする。

磁場がない場合の周期的ポテンシャルをもつシュレディンガー作用素はよく知られているように Bloch 理論を用いてスペクトルは絶対連続となることになっている ([T])。ところが  $B_0 \neq 0$  の場合には事情が複雑になってくる。それは通常の平行移動  $U(x_1, x_2) \rightarrow U(x_1 + T_1, x_2)$  と  $H$  が交換可能でないこ

とによる。その替わりに magnetic translation として知られる次の作用素  $S_1, S_2$  が  $H$  と交換可能となる:

$$S_1 u(x_1, x_2) := e^{-\frac{i}{2} B_0 T_1 x_2} u(x_1 + T_1, x_2)$$

$$S_2 u(x_1, x_2) := e^{\frac{i}{2} B_0 T_2 x_1} u(x_1, x_2 + T_2).$$

([21], [22] を見よ。) ところが  $S_1, S_2$  の間には交換関係

$$S_1 S_2 = e^{i B_0 T_1 T_2} S_2 S_1$$

が成り立ち、 $S_1$  と  $S_2$  が交換可能であるのは

$$(3) \quad \frac{B_0 T_1 T_2}{2\pi} =: N \in \mathbb{Z}$$

となるときである。  $N$  が有理数のときには周期を何倍かして考えればよいので、結局  $N$  が有理数が無理数であるかで  $H$  のスペクトルの様子は大きく異なることとなる。  $N$  が無理数の場合には  $H$  のスペクトルは  $[H-S]$  によつて調ばらばらであるがここでは (3) を仮定し、従つて Bloch 波を用いた解析ができる場合について調べる。

## § 2. Magnetic Bloch Theory

上の  $S_j$  を用いて Bloch 波の関数の空間を次の様に

$$\Sigma(p_1, p_2) := \left\{ u \in C^\infty(\mathbb{R}^2) \mid S_j u = e^{i p_j T_j} u \quad (j=1, 2) \right\}$$

とおく。但し、 $p = (p_1, p_2) \in \mathbb{R}^2$  は quasi momenta とおけば  
 48 パラメータ - 2", 明らか12,

$$\Sigma(p_1 + \frac{2\pi}{T_1}, p_2) = \Sigma(p_1, p_2 + \frac{2\pi}{T_2}) = \Sigma(p_1, p_2)$$

という周期性をもつので、 $p \in \Omega^* := [0, \frac{2\pi}{T_1}) \times [0, \frac{2\pi}{T_2})$  に  
 制限して考えれば"充分"である。これをを用いて

$$\Sigma := \left\{ u \in C^\infty(\mathbb{R}_x^2 \times \mathbb{R}_p^2) \mid u(x, p) \in \Sigma(p), \right. \\ \left. u(x, p_1 + \frac{2\pi}{T_1}, p_2) = u(x, p_1, p_2 + \frac{2\pi}{T_2}) = u(x, p) \right\}$$

とおくと、 $\mathcal{S}(\mathbb{R}^2)$  と  $\Sigma$  の間にユニタリ変換が存在する:

$$U: \mathcal{S}(\mathbb{R}^2) \ni f \mapsto u \in \Sigma, \quad \rho = (\text{vol} \Omega^*)^{1/2}$$

$$(Uf)(x, p) := \frac{1}{\rho} \sum_{l \in \mathbb{Z}^2} e^{-i(l_1 p_1 T_1 + l_2 p_2 T_2)} S_1^{l_1} S_2^{l_2} f(x),$$

とおけば  $U$  は全単射であり、

$$(U^{-1}u)(x) = \rho^{-1} \int_{\Omega^*} u(x, p) dx,$$

$$\|f\|_{L^2(\mathbb{R}^2)} = \|u\|_{\Sigma} := \left\{ \int_{\Omega \times \Omega^*} dx dp |u(x, p)|^2 \right\}^{1/2}$$

ここで  $\Omega = [0, T_1) \times [0, T_2)$  は  $V$  の周期の存在 lattice  $\Gamma :=$

$(\pi_1 \mathbb{Z}) \times (\pi_2 \mathbb{Z})$  の基本領域である  $(\Omega \cong \mathbb{R}^2 / \Gamma)$ . この  $U$  を用いて  $\tilde{H} := U H U^*$  とおけば

$$\tilde{H} = \int_{\Omega^*}^{\oplus} \tilde{H}(p) dp$$

と direct integral decomposition できる. すなわち

$$(\tilde{H} u)(x, p) = (\tilde{H}(p) u(\cdot, p))(x)$$

$$\tilde{H}(p) = (D_1 + \frac{B_0}{2} x_2)^2 + (D_2 - \frac{B_0}{2} x_1)^2 + V \quad \text{on } \Sigma(p)$$

となる.  $\tilde{H}(p)$  は  $p$  に依らず共通の形の微分作用素で  $\Omega$  上の定義されるが,  $p$  毎に異なる境界条件を付けて考えた作用素である. 正確には  $H|_{\Sigma(p)}$  の  $L^2(\Omega)$  での作用素の閉包を  $\tilde{H}(p)$  とおくと  $L^2(\Omega)$  上の自己共役作用素となり,

$$\text{Dom}(\tilde{H}(p)) = \gamma_{\Omega}(\Sigma(p) \text{ の } H_{loc}^2(\mathbb{R}^2) \text{ での閉包})$$

となる ( $\gamma_{\Omega}$  は  $\mathbb{R}^2$  の関数の  $\Omega$  への制限). すると  $\tilde{H}(p)$  は加藤の意味で解析族となり, また離散スペクトルをもつ.

$\{\lambda_j(p)\}_{j=1}^{\infty}$  は  $\tilde{H}(p)$  の固有値,  $\lambda_1(p) \leq \lambda_2(p) \leq \dots$  とすると  $H$  は  $\lambda_j(p)$  ( $p \in \Omega^*$ ) に依る掛算作用素とユニタリ一同値であり,  $\lambda_j(p)$  が  $j$  について  $p$  の非定数関数であれば,  $H$  は絶対連続であることがわかる.

### § 3. Landau Level Broadening

§2 の  $\tilde{H}(p)$  は定義域が  $p$  によって変わるため取扱「難い」ため、次のユニタリ変換  $W(p)$  を用いて同一の定義域をもつ作用素の族  $\hat{H}(p)$  を考える:

$$W(p)u(x) = e^{\frac{i}{2}(p_1 x_1 + p_2 x_2)} u(x_1 - \frac{p_2}{B_0}, x_2 + \frac{p_1}{B_0})$$

とみると  $W(p)$  は  $L^2(\Omega)$  のユニタリ作用素であり  $W(p)\varepsilon(0) = \varepsilon(p)$ .

$$\begin{aligned} \hat{H}(p) &:= W(p)^* \tilde{H}(p) W(p) \\ &= \hat{H}_0 + V(p) \end{aligned}$$

$V(p) := V(x_1 + \frac{p_2}{B_0}, x_2 - \frac{p_1}{B_0})$  による共変作用素

$$\hat{H}_0 = (D_1 + \frac{B_0}{2} x_2)^2 + (D_2 - \frac{B_0}{2} x_1)^2$$

$$\text{Dom}(\hat{H}_0) = \mathcal{D}(\varepsilon(0) \text{ の } H_{loc}^2(\mathbb{R}^2) \text{ における閉包})$$

となる。したがって  $\hat{H}(p)$  の固有値  $\{\lambda_j(p)\}$  について調べることになる。以下  $V$  が小さいと見た場合、 $\hat{H}_0$  からの摂動として計算を行う。まず  $\hat{H}_0$  のスペクトルは

$$\sigma(\hat{H}_0) = \{(2j-1)B_0 \mid j \in \mathbb{Z}, j > 0\}$$

となり、全平面で考えたときの定数磁場をもつシュレディンガー作用素のスペクトルと一致し、Landau level と呼ばれる。但し全平面の場合には各 Landau level の多重度は  $\infty$

であるが  $\hat{H}_0$  の場合には多重度は  $N$  である。実際  $\hat{H}_0$  の固有関数は具体的に計算できるのである。これには

$$A = i(D_1 + \frac{B_0}{2}x_2) - (D_2 - \frac{B_0}{2}x_1) \quad \text{on } \mathcal{E}(0)$$

$$A^\dagger = -i(D_1 + \frac{B_0}{2}x_2) - (D_2 - \frac{B_0}{2}x_1) \quad \text{on } \mathcal{E}(0)$$

とよくと交換関係

$$A^\dagger A = \hat{H}_0 - B_0, \quad AA^\dagger = \hat{H}_0 + B_0$$

を満たし、調和振動子の場合の生成・消滅演算子  $a$  と  $a^\dagger$  の  
である。

$$A = \frac{\partial}{\partial x_1} + i \frac{\partial}{\partial x_2} + \frac{B_0}{2}(x_2 i + x_1) = 2e^{-\frac{B_0}{4}z\bar{z}} \frac{\partial}{\partial z} e^{\frac{B_0}{4}z\bar{z}}$$

$$(z = x_1 + ix_2)$$

であることから、 $\text{Ker}(\hat{H}_0 - B_0) = \text{Ker} A$  はテータ関数を用いて表せる:

$$\psi_0^{(r)} = c e^{-\frac{B_0}{2}x_1^2 + \frac{B_0}{2}x_1x_2i} \zeta_r\left(\frac{z}{T_1}\right)$$

$$r=0, \dots, N-1, \quad c = \frac{(2N)^{1/4}}{T_1 z^{1/4}}, \quad z = T_2/T_1$$

$$\zeta_r(s) = \sum_{k \equiv r \pmod{N}} e^{-\frac{k^2}{N}\pi s} e^{2\pi i k s}$$

とよくと  $\{\psi_0^{(r)}\}_{r=0, \dots, N-1}$  は  $\text{Ker}(\hat{H}_0 - B_0)$  の正規直交基底となり

$$\psi_k^{(r)} = \frac{A^{\dagger k} \psi_0^{(r)}}{\sqrt{(2B_0)^k k!}} \quad r=0, \dots, N-1$$

とすれば,  $\{\psi_k^{(r)}\}_{r=0, \dots, N-1}$  が  $\text{Ker}(\hat{H}_0 - (2k+1)B_0)$  の正規直交基底となる.

$0 < \gamma < B_0$  として固定し,  $\gamma$  は充分小さいものとする.  $\Gamma_k = \{z \in \mathbb{C} \mid |z - (2k+1)B_0| = \gamma\}$  とする ( $k=0, 1, 2, \dots$ ). 擾動論により  $\hat{H}(p) = \hat{H}_0 + V(p)$  の固有値は,  $\|V(p)\| = \|V\|_\infty \leq \gamma$  のとき  $\Gamma_k$  内に多重度を込めて  $N$  個ある.  $I_k = ((2k+1)B_0 - \gamma, (2k+1)B_0 + \gamma) \subset \mathbb{R}$  とおくと

$$P_k(p) = E_{I_k}(\hat{H}(p)) = \frac{-1}{2\pi i} \oint_{\Gamma_k} (\hat{H}(p) - z)^{-1} dz$$

が  $\hat{H}(p)$  の  $I_k$  上の spectral projection である.  $Q_k$  を  $\text{Ker}(\hat{H}_0 - (2k+1)B_0)$  上の直交射影とすれば  $\|V\|_\infty$  が充分小的时候

$$\|P_k(p) - Q_k\| < 1$$

となるので  $\dim \text{Ran } P_k(p) = \dim \text{Ran } Q_k = N$  である.

$$D_k(p) = \{1 - (P_k(p) - Q_k)^2\}^{-1/2} \{P_k(p)Q_k + (1 - P_k(p))(1 - Q_k)\}$$

とおけば  $D_k(p)$  は  $L^2(\Omega)$  のユニタリ作用素であり  $P_k(p)$  と  $Q_k$  と intertwine する:

$$P_k(p)D_k(p) = D_k(p)Q_k.$$

よって  $\hat{H}(p)$  の  $I_k$  内におけるスペクトルは次の行列の固有値で与えられる:

$$\Lambda_k(p) = (\Lambda_k^{(rs)}(p))_{\substack{r=0, \dots, N-1 \\ s=0, \dots, N-1}}$$

$$\Lambda_k^{(rs)}(p) = (\hat{H}(p) D_k(p) \psi_k^{(r)}, D_k(p) \psi_k^{(s)}).$$

$\Lambda_k$  は  $p$  について  $(2\pi/\tau_1)\mathbb{Z} \times (2\pi/\tau_2)\mathbb{Z}$ -periodic であることが次の様な周期条件を満たす.

$$C_1 = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & \dots & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & \dots & 0 \\ \vdots & \vdots & \vdots & \ddots & \vdots & \vdots \\ 0 & \dots & \dots & \dots & 0 & 1 \\ 1 & 0 & \dots & \dots & 0 & 0 \end{pmatrix} \quad C_2 = \begin{pmatrix} 1 & & & & & \\ & e^{-\frac{2\pi}{N}i} & & & & \\ & & \ddots & & & \\ & & & \ddots & & \\ & 0 & & & & e^{-\frac{2\pi}{N}(N-1)i} \end{pmatrix}$$

とおくと

$$\begin{cases} \Lambda(p_1 + \frac{2\pi}{\tau_1}, p_2) = C_1 \Lambda(p) C_1^{-1} \\ \Lambda(p_1, p_2 + \frac{2\pi}{\tau_2}) = C_2 \Lambda(p) C_2^{-1} \end{cases}$$

この周期条件は Fourier 級数展開が

$$(4) \quad \Lambda(p) = \sum_{n \in \mathbb{Z}^2} a_n e^{i \frac{1}{N} (n_2 \tau_1 p_1 - n_1 \tau_2 p_2)} e^{n_1 n_2 \frac{\pi}{N} i} C_1^{n_1} C_2^{n_2}$$

と存在することと同値である. 一方  $P_k(p) \in V$  に  $\tau_1, \tau_2$  を展開すると

$$\Lambda_k^{(rs)}(p) = \lambda_k \delta_{rs} + (V(p) \psi_k^{(r)}, \psi_k^{(s)}) + O(\|V\|_\infty^2)$$

よって  $V$  の Fourier 級数展開は

$$V(x) = \sum_{n \in \mathbb{Z}^2} v_n e^{2\pi i \left( \frac{n_1}{T_1} x_1 + \frac{n_2}{T_2} x_2 \right)}$$

よすると

$$\begin{cases} V(p) = \sum_n v_n e^{i \frac{n_1 T_2 p_2 - n_2 T_1 p_1}{N}} U_n \\ U_n := e^{2\pi i \left( \frac{n_1}{T_1} x_1 + \frac{n_2}{T_2} x_2 \right)} \end{cases} \quad \text{と表わす掛け算作用素,}$$

よって

$$\left( (U_n \psi_k^{(r)}, \psi_k^{(s)}) \right)_{r,s} = \Phi_k(|\beta_n|^2) e^{\frac{n_1 n_2}{N} \pi i} c_1^{n_1} c_2^{n_2}$$

となる。但し  $\Phi_k$  は  $k$  次の Laguerre 関数であり。

$$\Phi_k(t) = e^{-\frac{1}{2}t} L_k(t) \quad \left( L_k(t) = \frac{1}{k!} e^t \frac{d^k}{dt^k} (e^{-t} t^k) \right)$$

$$|\beta_n|^2 = \frac{\pi}{N} \left( n_1^2 + \frac{1}{\gamma} n_2^2 \right).$$

これは交換関係

$$A^\dagger U_n = U_n A^\dagger + \alpha_n U_n$$

$$\alpha_n = (2\pi i) \left( \frac{n_1}{T_1} + i \frac{n_2}{T_2} \right)$$

から得られる。従って  $V$  の Fourier 係数と  $\Lambda_k$  の Fourier 係数  $\{a_n\}$  ((4) に表わされる) の間には

$$a_n = v_n \Phi_k(|\beta_n|^2)$$

の関係がある。このことから  $V$  が generic の時に  $\Lambda_k$  の固有値は非定数であることが推定される。実際  $N=1$  という制限的な場合ではあるが次の定理を得ることが出来る。

定理.  $B_0 T_1 T_2 = 2\pi$ ,  $\|V\|_\infty < B_0/2$  とする。次のいずれかが成立するものとする。

(i)  $V$ : 非定数 かつ

$$\textcircled{*} \Phi_k(|\beta_n|^2) \neq 0 \quad \forall k=0,1,2, \dots \quad \forall n \in \mathbb{Z}^2,$$

(ii)  $V$  の Fourier 係数が無限個  $\neq 0$ 。

このとき  $\exists \Sigma_V$ : 可算集合  $\subset [-1, 1]$  such that

$$H_\varepsilon = (D_1 + \frac{B_0}{2} x_2)^2 + (D_2 - \frac{B_0}{2} x_1)^2 + \varepsilon V$$

が  $\varepsilon \in [-1, 1] \setminus \Sigma_V$  に対して絶対連続である。

$\Phi_k(|\beta_n|^2)$  の形から条件  $\textcircled{*}$  は  $\eta = T_2/T_1$  が有理数のときには成り立つことがわかる。

## References

- [T] L. E. Thomas, Time dependent approach to scattering from impurities in a crystal, Comm.

Math. Phys. 33 (1973), 335-343.

[Z1] J. Zak, Magnetic translation groups I. II.,  
Phys. Rev. 134-A (1966), 1602-1611

[Z2] J. Zak, Group theoretical consideration of Landau  
level broadening in crystals, Phys. Rev. 136-A  
(1964), 776-780.

[H-S] B. Helffer and J. Sjöstrand, Analyse semi-  
classique pour l'équation de Harper, I-III,  
Supplément au Bull. Soc. Math. Fr. 116-118 (1988-  
1990).